

英語における痛みの表現について

A Contrastive Analysis of English and Japanese Pain Expressions

長谷川ミサ子*

Misako Hasegawa

1. 痛み表現の特性について

痛みの表現には国境がある。我々が日本語の中で用いる痛みの表現にそのまま対応する英語の表現を求めても得られないことがあるということである。例えば、歯科医へ行って「それしみるんですが。」と日本語でいうのを、英語に直したらどうなるか。“It hurts me.”である。歯科医が「これしみますか。」は、同じように、“Does it hurt you?”である。

「しみる」痛みを表す英語の表現がないというのは、なんとも心もとない。どうして、こんなことになっているのであろうか。痛みの表現などというものは、人間にとって、いわば、全く基本的な、原始的といっても差し支えないはずのものである。しかも人類に普遍的にみられる共通の感覚であるはずのものである。それが、うまく翻訳できないことになっているというのである。

現在は、テレビなどでも、同時通訳の場面が登場することも日常茶飯事となっている。よどみない同時通訳者の翻訳ぶりを目のあたりにしていると、例えば、英語から日本語へ、あるいは、逆に、日本語から英語へ翻訳するということは、熟達さえすれば、どんなことについても、

すぐできると思いがちである。が、これは誤りである。

けれども、こう言い切ってしまうためには、少し注釈を必要とする。翻訳は全く不可能であるわけではないからである。問題は、翻訳の「質」にある。例えば、食用きのこの「まつたけ」を、同時通訳者が a kind of mushroom と翻訳したとする。これは、間違いであろうか。間違いではない。同時通訳者は、「まつたけ」という語を翻訳しなかったとか、翻訳できなかったというのではない。が、うまく翻訳できたといえるであろうか。

最善を尽くしたとは言えるかもしれない。が、日本語の対応物をうまく表現したとは言えないであろう。同時通訳者の名誉のために急いで付け加えるが、これは、翻訳者の責任ではない。だれが試みても、これ以上あまりうまくゆくはずはない。もう少し形容詞を積み重ねるくらいがせきの山である。最大の原因は、言語のほうにあるからである。が、すべてのことが難なく翻訳可能であるのではないという点を見逃してはならない。

「しみる」という表現について、もう少し細かに考えてゆくため、まず、国語辞典における説明をいくつかみておくことにしよう。

(1) a. しみる

①液体が、ものの内部や周囲まですっかり入り込む。②液体やにおいがいつのまにか移りつく。比喩的にも用いる。③刺激がからだにこたえる。また、液体や気体などの刺激で刺すような痛みを感じる。比喩的にも用いる。④心などに深く感じる。

『大辞林』(三省堂)

b. しみる

①液体・においが物の中に、吸い込まれるようにして、はいる。②からだに鋭い痛みを感じる。③心に深く感じる。④影響を受ける。感染する。そまる。

『広辞林』(三省堂)

c. しみる

①液体が物に濡れ通る。しみこむ。また、よごれがついてなかなかとれない状態になる。②深くこころに感じる。しみじみと心にはいりこむ。③刺激がからだにこたえる。また、液体や塩分の刺激で、痛みを覚える。④なじみになる。ほれこむ。⑤物事が佳境に入る。興が増す。⑥影響を受けてその傾向に染まる。

『日本国語大辞典』(小学館)

d. しみる

①液体・においがなじみこむ。しみこむ。②影響を受けそうになる。③深く感じる。強い印象をうける。④からだに強い刺激を感じる。

『新選国語辞典』(小学館)

e. しみる→しむ

染色の液にひたって色のつく意から、あるものがいつのまにか他のものに深く移りついて、その性質や状態に変化・影響があらわれる意。①色が何かにそまる。色づく。②(液体が)ぬれとおる。③香

りなどがうつりつく。④よごれなどが付着して、なかなかとれなくなる。⑤影響を受ける。感染する。⑥感情に強い印象を受けて深く感じる。いつまでも心にかかる。⑦繰り返して行って親しんでいる。⑧しみじみと落ち着いた雰囲気になる。⑨気に入る。興に入る。⑩なじみになる。⑪(感覚を強く刺激されて)からだにこたえる。また、痛みを覚える。

『広辞苑』(岩波書店)

これらの辞書にみられる記述の中から「痛み」に関係のある部分を抜き出して(2)に並べてみることにしよう。

(2) a. 刺激がからだにこたえる。また、液体や気体などの刺激で刺すような痛みを感じる。

b. からだに鋭い痛みを感じる。

c. 刺激がからだにこたえる。また、液体や塩分の刺激で、痛みを覚える。

d. からだに強い刺激を感じる。

e. (感覚を強く刺激されて)からだにこたえる。また、痛みを覚える。

これらの場合、「しみるような痛み」というのは、概略、「からだに鋭い痛みを感じる」という趣旨が中心となっている。けれども「からだに鋭い痛みを感じる」ならば、それは常に「しみるような痛み」であるといえるであろうか。そんなことはない。例えば、きりの先で、皮膚を刺されるなら、通例、「からだに鋭い痛みを感じる」が、これを「しみるような痛み」ということはない。そうすると、他の「からだに鋭い痛みを感じる」場合と「しみるような痛み」とを区別する因子がどこかに求められなければならないことになる。その因子を求めてゆくと、「しみる」が痛み以外の表現として持っている、いわば、原義、すなわち、「液体がものの中にしみこむ、なじみこむ」に至りつく。

換言すれば、「しみるような痛み」というの

は、「まるで液体がものの中にしみこんでいくような、ちょうどそのような痛み」ということである。つまり、「しみるような痛み」というのは、「しみる」という語の比喩的転用を基盤としている表現である。

これには理由がある。痛み表現は、通例、身体の内部感覚に関する表現である。内部感覚は、直接的な指示表現を許さない。すなわち、「これ」とか「あれ」とかいうことによって指し示し、相手に分からせるということとはできない。結果的には比喩 (metaphor) に頼らざるを得ないことになる。この点は、「しみるような痛み」以外の痛み表現、例えば、「刺すような痛み」、「ひりひりする痛み」、「ずきんずきんする痛み」等々の場合も全く同様である。

ところが、メタファーには国境がある。すなわち、日本語におけるメタファーとは必ずしも重ならない。日本語に「しみる (ような) 痛み」というメタファー的表現があっても英語に同じようなメタファー的表現が存在している保証はない。既出の Does it hurt you? という痛み表現は、「しみるような痛み」に対応するメタファー的表現を英語という言語が持っていない以上、日本語でなら、「しみますか」と言うべき場面においても、精いっぱい痛み表現として用いざるを得ないことになるのである。

2. throbbing pain について

メタファーには国境があると前節で述べた。メタファー的表現に基盤をおく痛み表現は、日・英両言語において必ずしも重なる保証はない、とも述べた。けれども、このことは、日・英両言語における痛み表現が常に必ず重ならないことを意味するものではない。そのよい例が次の(1)に示す表現であると思われる。

(1) throbbing pain

この場合、まず、『コウビルド英語辞典』(1987)を調べてみることにしよう。If your

heart or blood, or part of your body, **throbs**, you feel a series of strong beats or dull pains.

ついでに次の(2)の『プログレッシブ英和辞典』(小学館)の throb の項を、問題となる点に限って、みておくことにしよう。

(2) throb

〈心臓などが〉(…のために)脈打つ、ずきずきする。

これによってみれば、throb が throbbing pain などにおけるように、痛み表現として用いられる場合、メタファーの基盤を成しているのは、心臓の鼓動である。つまり、throbbing pain というのは、「ちょうど心臓がどきんどきんと脈を打つように、そのようにずきずきする痛み」ということである。さらに言うなら、心臓がどきんどきんと波打つごとに波動的に感ぜられるずきんずきんという痛み、ということである。

ここで、次の(3)に日本語の「ずきずき」、「ずきんずきん」に対して『大辞林』(三省堂)が与えている説明をみることにしよう。

(3) a. ずきずき

傷などが脈打つように絶えず強く痛むさま。ずきんずきん。「ずきずき(と)痛む」、「頭がずきずきする」。

b. ずきんずきん

傷・頭などが、脈を打つように続いて痛むさまを表す語。ずきずき。「傷口がずきんずきん(と)痛む」、「頭がずきんずきん」。

これらによってみれば、英語の throbbing pain と日本語の「ずきずきする痛み」とはともに、そのメタファーの基盤を心臓の鼓動から得ていることが明らかである。これは、かなり珍しい例であるといつてよいであろう。が、日・英両言語が、特定の痛み表現に関し、共通のメ

タフナー的基盤を持っている場合、痛み表現に関する我々の理解に、何の違和感もないという点に注意すべきである。同時に、忘れてならないのは、大多数の痛み表現の場合、このような、違和感なしの理解は不可能であるということである。

3. 日本語における痛み表現とそのメタファー

ここで日本語における痛み表現の種々相について考えてみることにする。まず、次の(1)は『分類語彙表』(秀英出版)において「痛い」を表す表現として記載されているもののすべてである。

- (1)きりきり、ずきずき、ずきんずきん、ちくちく、ちくりちくり、ひりひり、ぴりぴり。

次の(2)は筆者の友人である内科医師と歯科医師から別個に聴取した痛みの表現を合わせて(重複を除き)列挙したものである。

- (2)きゅーと(痛む)、きりきり、しくしく、しみる、ずきずき、ずきんずきん、ずっきーん、ちくちく、ちくん
押えつけられるように痛い、締めつけられるように痛い。

次の(3)はアンケート調査による学生からの回答を整理したものである。

- (3)がながん、きーんとくる、きゅーっと(痛む)、きりきり、きんきん、しくしく、しみる、じりじり、じんじんする、ずーん、ずきずき、ずきんずきん、ちかちか、ちくちく、ちりちり、ちくんちくん、つーんとくる、ひりひり、ぴりぴり、ぴりぴ、みしみし。

以上のような日本語における痛み表現のリス

トは網羅的なものであるとは断定出来ないにしても、代表的な痛み表現は、ほぼ尽くされているとしてよいであろう。これらの痛み表現に関し、その根底にあるメタファーをすべて説明するつもりはない。が、以下その主要なものについて、概略を述べてゆくことにしたい。特に(1)、(2)、(3)のすべてのリストに生じている痛み表現(きりきり、ずきずき、ずきんずきん、ちくちく)を考察の対象から除外することは適切ではないであろう。ただし、既出部分において言及したもの(しみる、ずきずき、ずきんずきん)は以下の考察からは除外する。

(4)a. きりきり

『大辞林』によると「きりきり」は「腹や頭などが鋭く痛むさま」とある。腹が鋭く痛むのに、どうして「きりきり」を用いているのか。「がらがら」とか「からから」などではなくて、どうして「きりきり」なのか。そういうことが、この辞書の説明からでは分からない。他の類書も、この点に関しては、大同小異であろう。要するにメタファーとしての「きりきり」が担っているつなぎの部分明らかでない。これは、他の痛み表現にも等しく当てはまることであるが、国語辞典の不備を示すものであるとってよいであろう。私見によれば、「きりきり」がメタファーとしてもっているつなぎの部分は「きりの先が肌に食い込んでいく際に感ぜられるかと思われるそのような鋭い痛み」ではないかと思われる。

b. ひりひり

『大辞林』によると「ひりひり」は「皮膚・のどなどに痛みや辛みなどの刺激を感じるさま」とある。この場合も「ひりひり」が担っているメタファーとしてのつなぎの部分明らかではない。「ひりひり」について、そのつなぎの部分を明らかにするのは容易ではない。が、思う

に「ひりひり」は「表面的な皮膚（口内なども含む）に関し、火・熱などによって焼かれる際に感ずるようなそのような痛み」ということであろう。しかし、それが、どうして「ひりひり」であって、他の例えば「びんびん」とか「ばらばら」などでないのかという点になるとははっきりしない。

c. ぴりぴり

『大辞林』によると「ぴりぴり」は「皮膚に強い刺激を感じるさま。「びりびり」より弱い刺激にいう」とある。この場合も「ひりひり」と同様メタファーにおけるつながりの表現が何であるのかはきわめて明確であるというわけにはゆかない。が、「ぴりぴり」も皮膚感覚に関し痛みの感覚が一点に集中して起こるような感じがもとになっているように思われる。

(5) a. ちくちく

『大辞林』によると「ちくちく」は「針など先のとがったもので続けて刺すさま。また、そのような痛みを感じるさま」とある。この定義には「針などのとがったもので続けて刺すときに感ずるようなそのような痛み」というメタファーのつながりに関する明確な説明が含まれており、痛み表現の説明としては、典型的、模範的なものであるといつてよい。

b. ちくり

『大辞林』によると「ちくり」は「針など先のとがったもので皮膚を刺すさま。また、そのような痛みを感じるさま」とある。前項「ちくちく」の場合と同様この場合もメタファーにおけるつながりの部分が明確に示されており、辞書の定義としては模範的なものである。できることなら、他の痛み表現に関しても、すべて、このようなメタファーのつながりに関する

説明が盛り込まれていることを望みたい。

以上、日本語における痛み表現に関し、主として数種の国語辞典を参照しながら考察を進めてきた。十分な説明が与えられている場合も皆無ではないが、不十分な説明に終わっている場合が少なくない。国語辞典に関する限り、その記述は、むしろ、満足すべきものではないと言つてよいように思われる。

ところが、筆者はここで一つの発見をした。それは『擬音語・擬態語辞典』（角川）である。本辞典には、一般の国語辞典には見られないような説明が数多く見られるからである。例えば、国語辞典においてもメタファー的つながりの部分に言及があったとした「ずきずき」、「ずきんずきん」、「ちくちく」、「ちくり」などに関しては、もちろん、その他の痛み表現についてもメタファーのつながりに関する説明が見られるからである。それらを以下の(6)に示しておくことにしよう。

(6) a. がんがん

頭が、強く激しく連打されるように痛むようす。非常に興奮して、心臓の鼓動や血行が、速くなるような場合にも用いられる。「二日酔いで頭ががんがん割れるように痛む」、「難問続きでなかなか解けず、とうとう、頭ががんがん、耳がかつと熱くなる」。

b. きりきり

錐状のものをもみ込まれるように鋭く連続して痛むようす。「冷えたのか、急に腹がきりきりさしこんできた」、「頭がきりきり痛んで目もあけていられないくらいだ」、「全神経を使ってしまうためか胃がきりきり痛んでひどい苦しみを味わうことが多いのである」。

c. ずきずき

脈を打つように、絶えず強く痛むようす。

「腫瘍が膿んできたらしい。ずきずき痛む。」「脳天に響くように、ずきずきと頭が痛むんだ。」「傷が一晩中ずきずきして眠れなかった」。

d. ずきんずきん

ずきずきよりも脈打つ感じがより強い。

e. ちかちか

光線、微小物などの刺激で目が刺されるように断続的に痛むようす。「光化学スモッグにやられると、まず、目がちかちかと痛み出す。」「梅雨明けのころから、目のちかちかを訴えはじめた」。

f. ちくちく

針の先で何度も刺されるときのような痛みを、感覚的に、また情動的に感じるようす。「とげが刺さっているらしい。ちくちく痛い。」「まつ毛でも入っているのかしら。目がちくちくする。」「胃がちくちく痛む」。

g. ちくり

針の先で一回だけ刺すようす。

さらに、同辞典の「ひりひり」、「ぴりぴり」には次の(7)に示すような説明が見られる。

(7) a. ひりひり

皮ふが、痛みや辛ゆみなどの刺激を受けるときに感じる持続的な感覚。「転んで擦りむいた膝がひりひり痛む。」「傷口にヨードチンキをつけたらしみてひりひりする。」「海水浴のあとは肌がひりひりする」。

b. ぴりぴり

痛み、辛み、感電などの刺激を感じるようす。「いきなり釘が刺さったときには痛みがぴりぴりと脳天にまで走ったよ」。

これによってみれば少なくとも「ひりひり」、「ぴりぴり」が皮膚の痛みに関するものであることは明らかである。

4. 英語における痛み表現とそのメタファー

4.1. 英語における痛み表現

英語における痛み表現のリストを求める最も簡単で確実な方法は Peter Mark Roget (1977) *Roget's International Thesaurus*, New York: Harper & Row を用いることであろう。ただし、*Thesaurus* には pain, suffering, distress, discomfort, malaise, aches and pains; soreness, irritation, inflammation, sensitiveness, fester (化膿などで) うずく傷; ache, headache, backache, toothache, stomachache, heartburn (胸やけ); agony, anguish, torment, torture 等々のような一般語も含まれているので、これらは最初から考慮の対象外とする。このようにして上で考察してきたような日本語における痛み表現を頭におきながら、拾ってゆくと次の(1)に示すようなリストが得られる。なお、下位区分は *Thesaurus* のそれに準拠しているものである。

(1) a. pang, throes; seizure, spasm, paroxysm; twinge, twitch, wrench, jumping pain; crick, kink, hitch, cramp or cramps; nip, thrill, pinch, tweak, bite, prick, stab, stitch, sharp or piercing or stabbing pain, acute pain, shooting pain, darting pain, fulgurant pain, lancing pain, shooting, shoot; gnaw-ing, gnawing or grinding or boring pain; griping; girdle pain; stitch in the side

b. smart, smarting, sting, stinging, urtication, tingle, tingling; burn,

burning, burning pain, fire.

c. throbbing pain; splitting headache; gripes, gripe, gnawing, gnawing of the bowels.

d. rack (苦痛, 拷問), martyrdom (殉教, 苦痛).

以上のようなリストをみて, 特に著しいと思われる特徴は, その非擬音性, 非擬態性にあると思われる. もっと言えば日本語の痛み表現にみられる擬音性, 擬態性が単語の中に入り込まれ, 英語における痛み表現の単語は他の一般的な語, 例えば, come, go, jump, desk, dogなどと, 外見上, 少しも変わらない語の様相を呈しているということである.

ここでは以下, これらのリストにみられる痛み表現の語を網羅的に検討することはやめ, 日本語の痛み表現になんらかの点で対応していると考えられる語についてのみその内容を検討してゆくことにしよう. まず, 細かな検討対象とする語を次の(2)に示す語に限るとしよう.

(2) hurt, pound, prick, smart, splitting, stabbing, sting, throb, tingle, twinge

これらの語の痛み表現としての語義を次の(3)に『コウビルド英語辞典』によって確かめておくことにしよう.

(3) a. **hurt** (痛みを感じさせる, しみる, がんがんする, ちくちくする):

When something hurts or when you hurt it, you feel pain because you have been injured.

My leg was beginning to hurt ...

b. **pound** (がんがんする, ずきずきする):

If your heart or a part of your body

is pounding, it is beating or throbbing with an unusually strong and fast rhythm.

c. **prick** (ちくちく刺す, がんがんする, ひりひりする, ぴりぴりする):

If something pricks a part of your body, it causes a slight tickling or burning feeling.

d. **smart** (しみる, うずく, がんがんする, ずきずきする, ちくちくする, ひりひりする, びりびりする):

If a part of your body or a wound smart, you feel a sharp stinging pain in it.

His eyes smarted from the smoke of the fire.

e. **splitting** (きりきりするような (痛み), ずきずき [ずきんずきん] するような (痛み)):

A splitting headache is very severe or painful.

f. **stabbing** (がんがんするような (痛み), ずきんずきんするような (痛み), ちくちくするような (痛み)):

A stabbing pain is a sudden sharp pain.

I get these stabbing pains in my back.

g. **sting** (刺すような痛みを感じさせる, しみる, がんがんする, きりきりする, ずきずき [ずきんずきん] する, ちくちくする, ひりひりする):

If an insect, animal, or plant stings you, it causes you to feel a sharp pain and sometimes get a wound or rash, usually by pricking your skin with poison or brushing your skin

with poisoned hairs.

Bees do not normally sting without being provoked.

If part of your skin stings or if something that you put on it stings, you feel a sharp pain there.

He felt the iodine stinging like a needle thrust into his leg ...

h. **throb** (うづく, ずきずき [ずきんずきん] する, ちくちくする):

If your heart or blood, or part of your body, throbs, you feel a series of strong beats or dull pains.

His head was throbbing.

i. **tingle** (うづく, きりきりする, じんじんする, ずきずき [ずきんずきん] する, ちくちくする, ひりひりする, ぴりぴりする):

When a part of your body tingles, you slight prickling or stinging feeling in it.

j. **twinge** (うづくような痛み, きりきりするような痛み, ぴりぴりするような痛み):

A twinge is a sudden sharp pain or feeling of being ill.

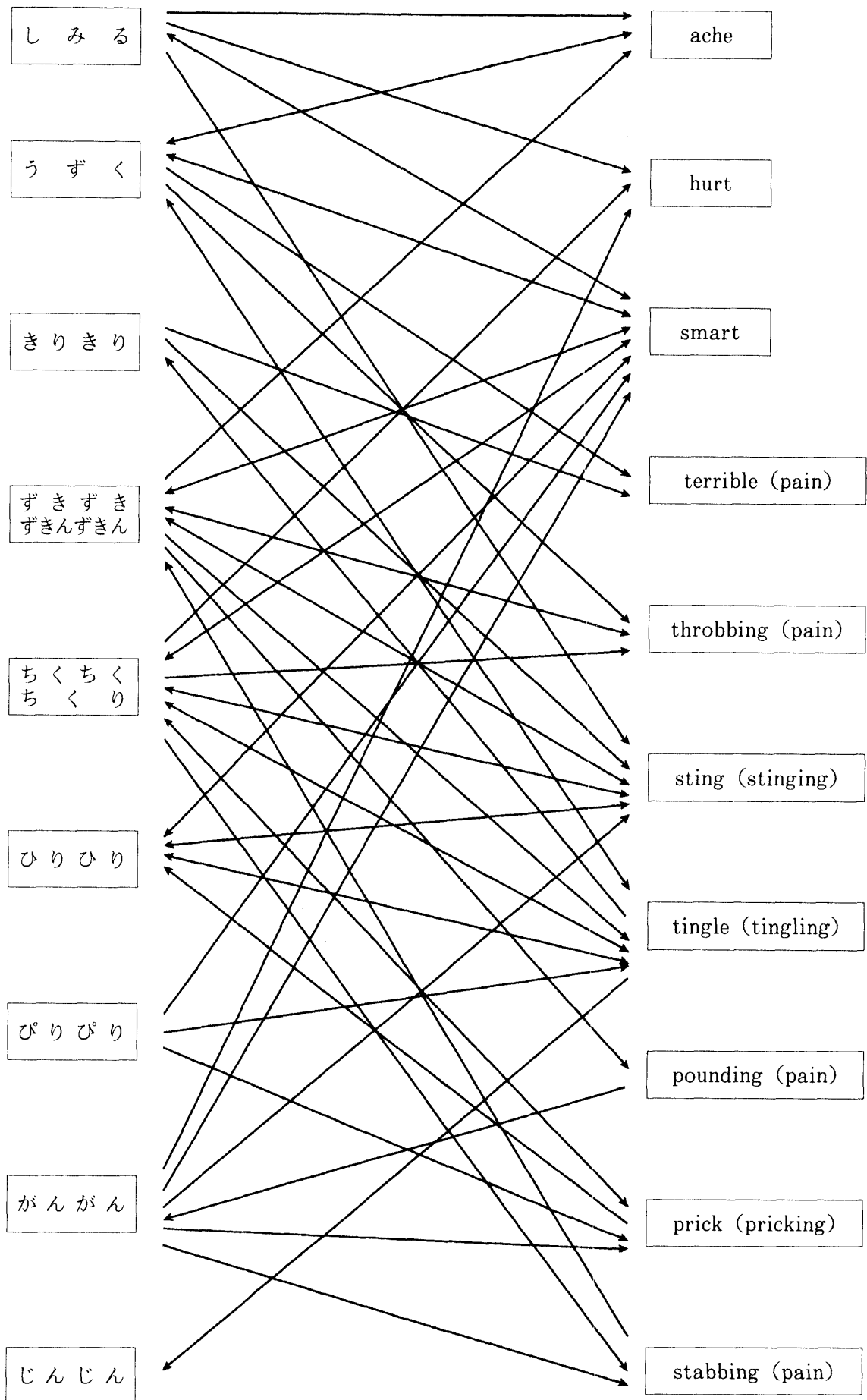
以上のような『コウビルド英語辞典』における説明を読んで, すぐ気がつくことがいくつかある。まず驚くのは, 英語における痛み表現と日本語における痛み表現との間にみられる落差の大きさである。英語の痛み表現は, 我々日本人には, 絶望的とさえ思われるほど貧弱であるような気がする。特に痛みの具体性に欠けているという印象が深い。英語における痛み表現が完全に語彙化され, その分だけ, いわば, 直接的な痛みのアイコン的(図像的)特性から遠ざ

かっているのに対し, 日本語の痛み表現は, 擬態語的要素, したがって, 音象徴的要素をその分だけ多くもっており, いわば, 生身の痛みにそれだけ近い表現となっているからであると思われる。このことは, 日・英痛みの表現のうち, 比較的対応がぴったりしていると思われる throbbing (ずきんずきん痛む) のような語の場合にもみられる。

5. 日・英痛み表現の対応関係

日・英痛み表現の対応関係は, (多くの項目を入れると線が複雑になりすぎるので, 用例は代表的なものに限るとして) 次のような図表を作ってみることによって, 一目瞭然となるであろう。(次ページの図表参照)

この図表の大きな特徴は, 日・英痛み表現の不均衡性であろう。一つの日本語の痛みの表現が, 複数個の英語の痛みの表現に対応し, 逆に, 複数個の日本語の痛みの表現が1個の英語の痛みの表現に対応していることが珍しくない。すなわち, 一対多(one-to-many), および, 多対一(many-to-one)という対応関係がみられるということである。ただし, 多対一は日本語の痛み表現から出発して英語の痛み表現に至る場合に多く, 一対多は英語の痛み表現から出発して日本語の痛み表現に至る場合に多いという点に注意すべきである。この点を, さらに支持する証拠として4章に掲げた英語の痛み表現に対する日本語の訳語(の数)を参照すべきである。この不均衡は英語における表現の貧しさをそのまま反映していると考えられるであろう。このような対応関係は, そのまま, 日・英痛みの表現にみられる「確かな対応関係の欠如」を反映しているものであると思われる。したがって, 日・英痛み表現対応図における左欄の項目と右欄の項目とを結んでいる線は, 真の意味における対応関係を示しているのではなく, むしろ, 同一の痛みと考えられるものを表す日本語の表現と英語の表現とを, いわば, やむをえず, 間に合わせ的に結んだにすぎないもので



日・英痛み表現対応図

あるというべきであろう。だからこそ、逆に言えば、1対1の安定した対応関係が得られないのである。なお、ここでいう1対1の対応を示す内部感覚表現の例としては、次の(1)に示すようなものが考えられる。

(1) 胸やけ \longleftrightarrow heartburn

この場合、日本語から出発して、その対応する英語表現を求めても、逆に、英語から出発して、対応する日本語表現を求めても、行きつく先は一つであるからである。

6. 結び

本稿においては、痛み表現というのは、内部感覚の表現であり、内部感覚の表現は、必然的に、メタファー的表現に依存せざるをえないという前提から出発した。ところが、メタファーには国境があり、したがって、日本語の痛み表現におけるメタファーと英語の痛み表現におけるメタファーとは、当然、重ならない部分をもつことが予想された。が、実際に、日・英痛み表現を比較してみると、メタファーが重ならないなどという段階の問題ではないことが、しだいに明らかとなってきた。両者は、むしろ、次元を異にするものであるというべきものである。英語の痛み表現は、我々日本人の目からみれば、まことに貧弱な、おそまつといっても言いすぎではないようなものであるという気がする。翻訳というような角度からみると、特に日本語から英語への翻訳の場合、具体性のある細かな痛みのニュアンスは、ほとんどすべて、切り捨てられることにならざるをえない。翻訳が、文化の伝達にとって有益なものであることは論をまたない。が、それが果たす役割を過信することは禁物である。

REFERENCES

- 浅野鶴子(編)(1981)『擬音語・擬態語辞典びよんびよん』角川小辞典12 東京:角川書店
- Chang, A.C. (1990) *A Thesaurus of Japanese-English Mimesis and Onomatopoeia: Usage by Categories*, Tokyo: Taishukan
- 藤田孝・秋保慎一著(1984)『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』東京:金星堂
- 金田一京助他(編)(1990)『新選国語辞典』第六版 東京:小学館
- 国立国語研究所編(1982)『分類語彙表』資料集6 東京:秀英出版
- kondo, I. and F. Takano (eds.) (1986) *Shogakukan Progressive Japanese-English Dictionary*, Tokyo: Shogakukan
- Konishi, J., M. Yasui and T. Kunihiro (eds.) (1980) *Shogakukan Progressive English-Japanese Dictionary*, Tokyo: Shogakukan
- Masuda, K. (ed.) (1985) *Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary*, Tokyo: Kenkyusha
- 松村明(編)(1988)『大辞林』東京:三省堂
- Nakajima, F. (ed.) (1984) *Sanseido's New Concise Japanese-English Dictionary*, Tokyo: Sanseido
- 日本大辞典刊行会(編)(1982)『日本国語大辞典』第十巻 東京:小学館
- Ono, H. (ed.) (1984) *A Practical Guide to Japanese-English Onomatopoeia & Mimesis*, Tokyo: Hokuseido
- Roget, P.M. (1977) *Roget's International Thesaurus*, New York: Harper & Row
- 三省堂編修所(編)(1987)『広辞林』第六版 東京:三省堂
- Sasaki, T., K. Kihara and T. Fukumura (eds.) (1985) *The Global English-Japanese Dictionary*, Tokyo: Sanseido
- 新村出(編)(1984)『広辞苑』東京:岩波書店
- Shumuta, N. and E. Sayama (eds.) (1984) *New Standard Japanese-English*

Dictionary, Tokyo: Taishukan

Sinclair, J.(ed.) (1987) *Collins Cobuild English Language Dictionary*, London and Glasgow: Collins

Yamagishi, K.(ed.) (1991) *The New Anchor Japanese-English Dictionary*, Tokyo: Gakken